

# 青年海外協力隊マレーシア会

会報 第7号

発行 2014.12.19

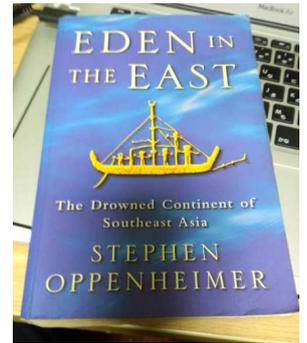
## 東南アジアは人類文明発祥の地＝エデンの園だった！

女子栄養大学研究所客員教授 草野 孝久

(元生物多様性生態系保全プログラムチーフアドバイザー)

コタ・キナバルの我が借家には、週末になるとサバ州の役人やら公園のレンジャー達がやってきては楽しく酒盛りをして行きました。自然保護関連法案が語られたり、楽器を持ち寄り大音楽会になったこともありました。昼間役所で会うのは至難の業の某長官も時々ゆっくりしていきました。その彼があるとき話題にしたのが『Eden in the East』という本でした。エデンの園つまり世界最初の人類の文明は東南アジア諸島にあったと書いてあるとのことでした。

さっそく、次のKL出張の機会にペーパーバック版を見つけて買ってきました。著者の Stephen Oppenheimer は英国人で、オクスフォード大とロンドン大で医学を修め、マレーシア、パプアニューギニアなどをフィールドにマラリアの感染と遺伝の関係などを研究し、ペナンのUSMでも教えていました。香港で4年、ブルネイで2年間教鞭をとるとともに小児科医としても務めています。こうした経験の中で集めた資料と調査データをもとに ”Eden in the East” を書き、1998年に発刊されたとあります。なかなかの難文です。1ページ毎に10回は辞書を引きました。



氷河期に、東南アジアの諸島部は今より180mは海面が低く、今は分かれているインドシナとマレー半島、インドネシアの島々、ボルネオ島、フィリピンまで繋がってインド大陸ほどの面積があったと言います。地誌学、考古学、古代生物学などでは、この地を「スンダランド」と呼んでいます。現在のスンダ海峡周辺だけではなく、氷河期に繋がって陸だった部分を指しています。

さて、このスンダランドの低地部、つまりボルネオ島、スラウェシ島、ジャワ島とマレー半島に囲まれた、今は沈んでしまった低地で人類最初の文明が栄えた、とこの本は説明するのです。ミトコンドリアのDNA分析から、人類がアフリカを出てからの移動の軌跡が分かりだしていました。人類は6万年前にはスンダランドに来ていたとされます。スンダランドの低地では1万年ほど前から農耕文化、漁労と航海技術などが発達したとされます。



著者は、このスンダランドの低地こそが「文明のゆりかご」であったと主張しています。地質学、考古学、遺伝学、言語学、民俗学など多岐に亘る資料と調査結果を証拠として自論を進めます。ノアの方舟伝説は大西洋の話ではなく、氷河期の終わりころ北米大陸の膨大な氷塊が海中に落ち、海面が一気に上昇し、スンダランドの低地が沈んだエピソードのことだと結論付けています。

スンダランド低地の人々は、方舟で東へ西へと移住していき文明を伝えたのです。この人たちが、やがてインド洋を超えメソポタミアの地にたどりつき、航海技術や農耕技術を伝えると同時に、海面上昇伝説も伝えます。

それこそが、後の「ノアの方舟」伝説となりキリスト教とともにヨーロッパに伝わったのだということです。マレー半島のオラン・アスリの複数の部族から聞き取った伝承にも大陸沈没の話が必ずやありました。

それからしばらくは、我が家はサバ州高官たちのスンダランド研究会のような有様で、この本を読んだ感想を語り合う場となりました。私は、そのころ考古学の本で仕入れた、8千年前の古代日本にはスンダランドからツボを作る技術を持った人々が移住していたという話を紹介し、俺たちはみな兄弟だなどと盛り上がっていました。とまれ、東南アジアこそ最初の人間文明の発祥地という啓示は、サバ人の誇りを大いにくすぐったものだったことでしょう。

この本が日本語訳されることもなく、世界的にあまり評価された形跡はないのですが、私がボルネオの生物多様性保全に努めていた頃の懐かしい思い出の証として、自宅の本棚に今も収まっています。

(写真上:件の本、写真下:東側から見たキナバル山)

## —東日本大震災から3年半が過ぎました—

勝俣 祐二 (59-3 冷凍機器)

このマレーシア会の役員でもある郡昭治さんのあとを受けて今年の4月から仙台にある復興庁の宮城復興局に勤めています。

東日本大震災によって壊滅的な被害を受けた岩手、宮城、福島3県の被災自治体では復興事業の加速化をはかっていますが、もともと規模の小さな市町村が多く、正規の職員のみでは事業は進みません。全国の市町村からの派遣職員や被災自治体が独自に採用した任期付職員、そして復興庁が公募採用した復興支援専門員、これらの人たちが昼夜分かたず一日も早い地域復興に向けて尽力しています。

あの震災から3年半が過ぎました。

復興局にいるので、被災地自治体の職員の方々と話す機会が多くあります。特に被害の甚大だった三陸沿岸部の市町村職員の人たちは、この3年半、不眠不休で地域の再建に取り組んでいます。ある自治体では津波によって庁舎とともに職員の半数近くを失い、残った職員もご家族を失っています。そうした厳しくつらい事実を胸に抱えたまま、それでも地域の再活性化、住民が安心して心豊かに暮らせるまちづくりを目指して、日々復興事業に取り組んでいます。東北人気質で私的なことは多く語らない人が大半ですが、ふと呟いた”ずっと悪い夢をみつづけているようださ”という言葉に心の内に押しこめている闇の深さを想って、かける言葉がみつからなかったこともあります。

激震と津波によって生じた膨大な量のがれきも今は殆どの地域で整理され、道路の復旧や港湾の整備、農地の除塩も進んでいます。

しかし、一瞬にして肉親や大事な友人を亡くされた被災住民の多くは心の傷が癒えないまま今もって仮設住宅での不自由な生活を余儀なくされています。そして、ときとして反駁し合う自治体側と住民側ではありますが、ともに被災者であることは紛れもない現実です。

平成25年1月、復興庁・JICA・JOCAの3組織による復興支援連携協定が取り交わされました。宮城県内の復興庁採用の被災自治体応援職員は現在70名ほどですが、その約半数弱、30名が協力隊出身者です。私のように復興局勤務の者も宮城だけでも数名はいます。

現地で復興事業に関わっていると、なかなか先の見えない、終着点の見出せない状況に暗澹とすることもあります。子供たちの抜群の回復力を見て勇気づけられます。もう3年半も経ったのか、まだ3年半しか経っていないのか、いずれにせよ、震災復興は端緒についたばかりです。



( 震災前の女川 )



( 震災後の女川 )

# 作業療法士の足あと ～ボランティア活動報告～

原 早恵子（ H23-4JV 作業療法士 ）

Selamat berkenalan! 私は首都クアラルンプール近くの公立スラヤン病院で作業療法士として精神障害を持つ人々に対してのリハビリテーションの質の向上を目的に、1年9か月活動してきました。

みなさん作業療法士という職業はご存じですか?作業療法士は障害を持つ人々に対して、いろんな作業、場所、人の関わりを用いてリハビリテーションを行います。

将来移住したい国No.1に選ばれるほど、住みやすい国とされているマレーシア。モノや設備もある程度整っていて、赴任当初は、本当にこの国に青年海外協力隊が必要なのかと目を疑いました。しかし、ふたを開けてみると、精神障害は差別と偏見の目が根強く、「Orang gila(きちがい)」という別名がつき、社会参加への支援の課題が大きく浮彫になっていました。また、スラヤン病院では、作業療法部門と精神科部署との連携が不十分でした。

そのため、入院病棟では各種作業活動（園芸、音楽、手工芸、体操、軽スポーツ）、リスク管理としての5S活動、外来のデイケアや訪問作業療法を通し、実践を持って個別支援の重要性や記録の大切さを伝えていきました。訪問活動では、「早く活動終わらしてよ!」と急かされながらも、手工芸やお薬カレンダー作り、セルフケア活動（歯磨き、入浴）等、患者さんのニーズに合わせて行える流れを作ることができました。



苦労したことは、スタッフの温度差でした。自分の語学力不足もありうまく意思疎通が図れずに涙したこともありましたが、しかし、仕事は、得意・不得意分野があることは日本でも同じだと言いつつ聞かせ、上司に常に相談しながら、協力者探しを行いました。すると、園芸に関心のあるスタッフが「土をなじませるにはピーナッツ!」と材料を準備してくれたり、音楽に関心のあるスタッフがいつの間にか演奏の場に混じっていたり・・少しずつ協力者が増え、いつの間にか「全員が同僚」。院内就労として、病院の食堂と連携し、飲み物のパッキング作業を開始したことは、同僚にとっても自信付けとなり、「やり方の引き出しが増えた。楽しい!」と言ってくれるようになりました。同僚と一緒に対象者の良い面を引き出したことで、他職種のスタッフに作業療法についての理解が得られるようになり、より密な連携を取ることが出来るようになりました。



派遣一年後より対外的な活動発表の機会にも恵まれ、日本のOTの広報活動も行えました。ボランティア活動は「リレーのバトン」で、現場のスタッフが前向きに走っていきけるようにするには、どうバトンを渡すかが大きな鍵になっていたような気がします。自分本位にならず、常に上司や同僚と相談し、相手の立場を理解してから活動を提案する大切さを学びました。



帰国後約1年が経ちました。休職していた間に、現在の職場環境も変わりました。しかし、組織作りや人間関係を考慮しながら、周囲に働きかけていくことは、ボランティア活動の延長線のように思えます。協力隊の経験が幻のように思えるときもありますが、臨床業務の合間に、近隣の小学校や高校等で、出前講座として、活動報告の機会を頂いています。また、京都市職員の JICA ボランティア経験者が有志で行っている「ARCO IRIS」という研究会活動にも参加させて頂き、日本でのイベントを通して、協力隊の良さや国際協力の大切さを発信しています。このような、協力隊の経験を共有出来る時間を作ることが、今の自分の原動力にもなっています。ボランティア活動を通して出会えた現地の方や隊員仲間、関係機関の方々への感謝の気持ちを忘れず、今後も、人とのつながりを活かし、障害を持つ方の社会参加を支援する作業療法を行っていかねばと思っています。貴重な経験を Terima kasih (ありがとうございました)



# カンボン昔話

笹森 栄 (H3-3 保母、2002 早期幼児教育 SV)

1992～95 年まで JOCV、また 2002～05 年には JICA SV として技術移転の支援に携わりました。現在は教育技術を提供する会社 KodomoJimusyo.Sdn.Bhd の経営をしております。JICA マレーシア事務所が 50 周年を迎えると言う事で、20 余年前のカンボンでの生活を昔話風に記してみました。

マレーシアに JOCV 保母隊員として派遣された Saki さんのお話です。-----

Saki さんは、1992 年葉桜の頃、JOCV 3 年 3 次隊としてマレーシアに派遣されました。配属先は FELCRA、任地はマレー半島の中央タマンヌガラ近くの陸の孤島と言われるパハン州 FELCRA Sungai Temau という、小さな入植地でありました。



入植者はクランタン出身者が多かったそうです。それ故、彼女は駒ヶ根で習得したマレー語に加え『Nak・gi・mano?(ナ・ギ・マノ) / Andamahupergikemana?』と言うような、クランタン訛りのマレー語を習う事になったのでした。すぐ近くの森林からは、直径 2 m 近くもある巨木が連日トラックで運ばれ、赤土を舞い上げていました。



Saki さんが 1 リンギットコインを手のひらに乗せ、卵と交換した日に、この村で自炊が始まりました。その翌日、たくさんの蠅に見守られて並んでいる川魚と肉、水気の無い青菜などを紅茶色の水道水で洗いました。それらを、生姜と唐辛子で味付けた料理はたいそう美味であったとか。

夜間のみジェネレーターで電力を得る事が出来たこの村では、夕方 7 時になると外灯がつきます。子どもたちは TV を見るために走って帰りました。Saki さんは扇風機にスイッチを入れた後、日本から持参したワープロを横目に、手書きのマレー語単語帳を作り始めるのでした。

稀に繋がる無線電話が緊急時の外部との連絡の手だてでした。そんな状況ですから、郵便物も時間を要しました。「辺りの雪も大分消えました。」と書かれた日本からの便りを手にしたのは、5 月末の頃だったそうです。

当時、保育士の月給は 180 RM。皆、17～19 歳の年頃の娘っ子たちばかり。赴任初期の事、恋愛話に盛り上がり、保育をおごなりにする彼女たちにストレス山積の日々。マレー語の習得と娘っ子たちとの関係づくりで心をすり減らした Saki さんは、3 ヶ月で 5kg も体重が増え、ゴム入りズボンのお世話になったそうです。



貸与バイクと同車種

さて、Saki さんの生活の足は JICA 事務所から貸与された 90cc のバイクでした。マレーシアで運転免許を取った Saki さん、赤土の轍と砂利道を走って腕をあげたのですが、ある日、

愛用のヘルメット



小川の木橋でタイヤを滑らせ転倒。左肘下を擦りむいた傷が膿んで夜も眠る事が出来ません。しかし、バイク貸与の取り消しを恐れ小畑調整員には報告しなかったそうです。

1年後、FELCRA 保母隊員派遣収束期を見据え Saki さんはマラッカへの任地替え決定。

前日、村民集会場に Saki さんをお世話した人や、一緒に遊んだ子ども達が集合。ド  
ドールを3時間もかけて煮詰めてきたおばさん、入植時ジャングルだった FELCRA  
Sungai Temau の話を深夜1時過ぎまで話してくれたじいちゃん、ドラム缶のガソ  
リンをポンプで瓶に入れて売ってくれたおっちゃんたちです。



村民運動会以来のにぎわいで、送別会に名を借りたお祭りです。

生温かいマレー食を手で食べながら皆、言いたい事を包み隠さずいいました。『もっとマレー語勉強せいよ。  
はっはは』『マラッカは便利でいいとこだから心配するな。』『泣くな。』『ドリアン食べに来てね。あんた、  
大好きだもんね。』『また、遊びにこい。』『元気でね。』

翌日、Saki さんは事務所のジープにわずかな荷物を積み込み助手席にすわっていました。ジープで村を一  
回りしてから新任地マラッカの FELCRA Ramuan China へ着くまで泣き続けたという Saki さん。そんな  
体力があったんですね。

マラッカの所長は転任してきた Saki さんのぐしゃぐしゃ顔を見て、あごをひき目を丸くしたのでした。そ  
の後、Saki さんは FELCRA Sungai Temau での体験と同様、マラッカでも充実した日々を送ったので  
しょうか??それは、直接 Saki さんと会った時に聞いてみて下さい・・・ね。

これで KLCC も LRT もなかった頃のマレー半島陸の孤島 Sengai Temau のお話はおしまいです。

2002年：子連れ JICASV として二度目のマレーシア赴任。配属先はかつての配属先  
FELCRA を傘下におく KEMAS。研修部で研修所講師らへ技術指導実施。



2005年：NGO、EKO (Education Kanakkanak Organization)創設、JICA SV 時代には  
関わっていない諸省庁や学校、私立の幼稚園・保育園などで専門技術指導開始。  
日本とマレーシアの保育専門家の交流事業実施。

2009年：幼児教育技術支援会社を設立。首相府直下の PERMATA で研修講師を務めながら、  
諸省庁で専門技術を提供。マレーシア保育指導書改訂版作成員唯一の外国人となる。

今日まで周りの方々の支えにより活動が出来ました事に感謝しています。

みなさま、地味な私ですが当会の新メンバーとして、どうぞよろしくお願ひします。 拝

\*\*\*\*\*

**原稿募集!** 会報への原稿は随時募集しております。隊員時代の活動報告、帰国後の状況報告、  
地域での活動などなど、事務局までお寄せください。お待ちしております。

## サモアから

坂本 良子 (55-1、幼稚園教諭)

こんにちは。私は 55/1 (幼稚園教諭) サバ州で活動しました。その頃の思い出は楽しくもあり自分自身の知識及び経験のなさを恥じております。でも兎に角人生においてはいい経験となりました。そんな私は現在シニアボランティアの夫の随伴者として南太平洋州に浮かぶ小さな島国、サモアに今年の一月から滞在しております。因みに夫には是非とも協力隊を理解して欲しかったので、今回二度目のボランティア活動でさらにレベルアップ??しているのではないのでしょうか (前は PNG でした)。

さてサモアでの南国生活ですが、マレーシアの気候とは少し違うようです。雨季と乾季に分かれるのは同じですが、乾季の始まる 4 月から 9 月の間の夜間は寒いと感じます。だいたい 23 度位でしょうか? おかげでとても寝やすくエアコンは必要ありません。さらに大変安全であり、人々の愛想の良さに最初は吃驚した程です。

首都アピアにほとんど人口が集中しておりますが、高層ビルはなくゆったりとしています。家屋はファレと呼ばれ屋根と柱と床でできており、四方からの風が素通しの為、大変快適です。最近壁がある家も多くなっていますが、田舎ではほとんどはファレです。



またそれぞれの庭が広く、日本で言うところの観葉植物が素晴らしく生育して整えられています。花が少なくても色とりどりの葉が生い茂っており見事です。

そんな中、最近見つけたのが高木で面白い形の実を付けた木でした。たぶんマレーシアにあったはずなのでしょうけれども? 記憶には全くありません。歳を重ねると趣味も思考も変わるので、サバにいた時にもっと見ておくべきだったと後悔しています。

その木はなんとマレー語の K a p u k (綿) の木です (またはパンヤンツリー)。サモアはほとんど全ての物が輸入品であり、マレーシアと違い美味しい食事や物品にありつけることはありません。手芸好きの私にとってはいろいろな部材が不足であり、現地にて安価な代用品をさがすのは大変困難なのですが、この綿の木を発見した事でぬいぐるみのような作品も出来ることになります。

皆さんマレーシアで見たことありましたか?

今このカポックの実の木に吊られたまま開いて綿が飛んだり、下に落ちていきます。時々そんな光景を見ては、庭先に入り込んで住人に確認をとっていただいております。とにかく目立ちます。来た頃には全く目につかなかっ



たのですが、さらに使える物がないか観察しています。

JV を体験したことでどんな地域でもなんなく暮らしていける精神、本当に協力隊に感謝する現在です。

では皆様、もしサモアへ来られる機会がありましたら、是非ご連絡ください。平成 28 年 1 月まで滞在予定です。

## 協力隊 50 周年記念行事と 第 3 回総会について

第 3 回総会を K.L.において開催すべく検討している旨、会報第 6 号にてお知らせ致しました。皆様からは賛同のご意見を寄せていただきました。

その後、JICA 青年海外協力隊事務局及び K.L.事務所と協議しました結果、現時点での計画案の概要は次のとおりです。

本件について、忌憚のないご要望、ご意見をお聞かせください。

1. KL 事務所では、2016 年 1 月頃 (\*) マレーシア政府関係者等招待し、記念式典を開催予定。(\*) 初代隊員のマレーシア到着時期から 50 周年目

K.L.で会い  
ましょう!

2. マレーシア会としての計画案
  - ・役員会において協議した結果、50 周年の節目の年からも JICA が計画している記念行事に合わせマレーシア会第 3 回総会を K.L.で開催する方向で準備する旨合意しました。
  - ・現地集合現地解散の形で考えています。
  - ・上記準備にあたり、在 K.L.OV の笹森さんに JICA KL 事務所との連絡調整役をお願いしました。

【連絡先】マレーシア会事務局

右記、住所・電話・メール宛、要望お待ちしております。

### 峰村 OG、JICA 理事長表彰受賞！

会報 3 号にも寄稿していただいた峰村史世 OG (平成 9 年 2 次隊、水泳) が理事長表彰を受賞されました。おめでとうございます。お祝い会の写真です。



### グローバルフェスタ 2014 出展

10 月 4、5 日、東京日比谷公園でグローバルフェスタが開催され、出展いたしました。あいにく、2 日目は台風のため昼までで中止となりましたが、それでも運営事務局の発表では 7 万人強の方が、入場され、国際協力関連団体が多数出展し、にぎやかでした。当会のブースにも多くの方が訪れてくださり、帰国間もない OV の来訪もあり、貴重な交流の場となりました。



### 寄付のお礼・・・ありがとうございました！

中野宏(42/2)、小林広(58/2)OV2 名より 2 万円のご寄付いただきました。そのほか 40 周年記念事業で出展したジュンパラギマレーシア有志の会より活動費残金 38,516 円を当会へ寄付いただきました。寄付は随時受け付けております。よろしく願いいたします。振込先：

郵便局記号：10140 番号 51611341

(郵便局外から振り込みの場合：店番 018、普通口座 5161134 です)

口座名義人：青年海外協力隊マレーシア会  
代表 白山 肇

マレーシア会は国際協力サロン内に事務局を置きます。なお、この会報は青年海外協力隊マレーシア会会員と 2010 年の青年海外協力隊 OB/OG 会出席者に E メールもしくは郵送の形でお送りしています。配信を希望されない方はご連絡ください。また、会員は現在 480 余名ですが、まだ、会員登録されていない方には、是非マレーシア会のことをお知らせください。

発行 青年海外協力隊マレーシア会 会長 白山肇  
162-8433 東京都新宿区市ヶ谷本村町 10-5

JICA 地球ひろば メールボックス 51

TEL：090-7186-1065 (国際協力サロン)

MAIL：malaysia@ics-together.com

URL：http://ics-together.com/jocvmalaysia.htm